大学間連携を軸に、付加価値の高い新産業と新人材を育める都市を目指して欲しい。

―― サイバー大学 IT 総合学部長　教授　川原洋氏

川原　洋（かわはら　ひろし）
1984 年マサチューセッツ工科大学工学部博士課程修了。資源探査の研究開発職から IT 関連企業を経て、2000 年 4 月（現）ソフトバンク BB 社に技術担当執行役員として入社。以来、ソフトバンクグループ内の新規事業会社の CTO を歴任。2007 年 4 月サイバー大学 IT 総合学部専任教授着任。2011 年 4 月より現職。

技術やイノベーションが進歩した 25 年

私は東京の高校を卒業後、学部、大学院をアメリカで過ごし、仕事の関係で日本に戻って来ました。バブル景気とバブル景気崩壊後の日本を東京で経験しました。バブル景気の崩壊を境としたマネーゲーム的な経済の上がり下がりは確かにあったと思いますが、私のような技術の現場にいて、そこから少し距離を置いた立場から見ると、バブル崩壊後でも情報技術やそれに下支えされた日本の産業基盤は着実に進歩した時代だと思っています。

例えば、システムのダウンサイジングや分散化は欧米の後塵を拝したとはいえ、メインフレームの多くは確実に PC やクライアントサーバ式の分散システムに置き換わっていきました。インターネットについていえば、ソフトバンクが広帯域の通信サービスを一般消費者でも契約できる定額制として始めて以来、世界でトップクラスのブロードバンドの浸透率を誇っています。そしてこの通信サービスの進化は、モバイル通信にもパケット通信サービスの定額制として引き継がれ、さらに成長を続けています。

日本の組織力は世界に向けた新しい付加価値

戦後、日本は欧米に追いつけ追い越せで、日本人なりの周到にものを見て、些細な部分にも考えを及ぼすという緻密性を長い年月を費やして培い、それが文化的な土壌に至るまでになっています。私は日本人のこの緻密さは、別の意味で創造的な思考活動と考えます。この精神論と言いたくなるような周到なシステムを構築できる能力こそ、世界にアピールできる「商品」と考えます。箱物やありきたりのソフトは陳腐化し、それで優位性を示すことはできません。そうではなく、日本ならではの組織的なチームプレーによる完成度の高いサービスモデルこそ、世界に対して発信できる新しい「価値」になり得るのではないでしょうか。

よく中国のソフトウェアハウスの経営者や現場のプログラマーとのコミュニケーションで感じるのですが、中国は個人競技的な分野は得意なのですが、日本の持つ緻密性やディテールの詰め、そしてそれを組織的なシステムとして作り上げることが苦手です。先日起きた中国の高速鉄道の事故とその事後処理などは典型

的で、営業開始以来、数十年に渡って一度も死亡事故を起こしていない日本の高速鉄道と比較すると、その差は歴然としています。

福岡に来てみて、様々な魅力を実感

私は現職に就く前はソフトバンク内で新規事業を担当していました。サイバー大学も教育サービス分野の新規事業といえますが、アジアビジネス特区として福岡市から支援を受け、協働でアイランドシティに学校を作ったことがきっかけで、私自身と福岡との関係ができ、今日に至っています。

東京から来た者の視点から、福岡で非常に新鮮に感じたことは、東アジアの都市に近いという地の利、いわゆる地政的な優位性です。もう福岡の方々は十分認識されていると思いますが、これからも東アジアの中の福岡という位置づけを意識していくべきだと思います。

また、住みやすさも非常に実感しています。コンパクトなエリアに色んなものが集積されていて、高い質で文化的・娯楽的なものがあり、豊富で新鮮な食材もあって、物価も当然、東京より低いですから、できるなら東京の家を引き払って福岡に移住したいと思うほどに魅力を感じています。また、福岡には外から来た人を温かく受け入れる土壌があります。「福岡で二度泣く」、すなわち東京から福岡に転勤するときは都落ちだと泣き、去る時は福岡の良さから去りたくないと泣く、という言葉は以前から耳にしていましたが、福岡に来て私もまさにその魅力を実感しています。

アジアの中で先導的に何ができるかが課題

その一方で、福岡の課題も見受けられます。25 年前からアジアを意識した様々な施策が行われました。例えば、アイランドシティ開発では、地下鉄を整備して企業を誘致するという構想があったものの、経済が追いついてこなかったことなどもあって、途中で当初計画が頓挫しました。この例のようにアジアとの地理的な近さがありながら、それを上手く機能させることができなかった残念な例もあると聞いています。

また、福岡にはハイテク産業、特に IT のソフトウエア開発やゲーム会社などで非常に著名な企業があり、コアとなるべき独自産業がありますが、それらの多くの企業が東京を向いた位置づけになっていることは残念です。東京に常に向いているということは日本市場だけみているということです。福岡の成長は東アジアという市場をみるところから始まると思います。

アジアに近い地の利と優秀な人材を組み合わせることで、東京に行かなくてもここで東アジア、さらにその先を相手とした十分なビジネスがあり、優位性の高い企業活動が十分可能だと思いますが、福岡はまだその実力を発揮していないようにみえます。

福岡はアジアに一番近い日本の玄関口です。ジャパン・エンジニアリングのポータル（玄関）が福岡にあるようになれば、特に東アジアなどから人は集まるでしょう。ハード、ソフト、文化・芸術など日本の特長的なものが、高度なレベルで福岡には一通り揃っています。ですから、福岡には、いわば常に運用されている見本市のような都市を目指して欲しいと思います。

地理的優位性と人材を活かした成長を目指せ

福岡は東京、京都に次いで大学が多く、学生も多い都市です。教育熱心な土地柄で文化的に教育水準が非常に高いと思います。しかし、ソフトバンク本社にも福岡出身者が結構いますが、これは福岡の優秀な学生が東京の大学に入り、そのまま東京で就職するという構図は、他の地方都市とあまり変わりません。留学生も少なくないと思いますが、福岡の大学で教育を受け、そのまま福岡に残るにしても、上海やソウ

ルなどに戻るにしても、東アジア圏で大きな活動ができるような人的ネットワークができると良いと思います。

北京大学や清華大学など中国のトップクラスの大学を卒業しても、中国内ではなかなか就職先がないと聞いています。それは中国企業は常に経験者を採用したがるからだそうです。つまり新人教育に重きを置いていない。そうであるならば、福岡はこのような経験はなくても優秀な人材を受け入れて、地場産業に取り込む、あるいは、ある一定期間の経験を積ませた上で、彼らを中核的人材として中国や韓国の企業と連携するなど、様々な人的リソースの活用方法があると思います。

福岡にある文化的、学術的な強みを活かし東アジアの都市と対峙することは、今後の福岡にとって非常に重要な戦略になるでしょう。福岡からだと上海やその他の中国の沿岸都市、ソウルなど東アジアの都市の企業と連携すれば、それぞれは小さな案件かもしれませんが、地の利を生かした膨大な物流と人の往来が可能と思います。

大学が連携しエリアで人材育成する仕組みを

福岡には二十数校の大学が集中し、個々の大学はそれぞれ素晴らしい特色があります。しかし、各大学は学生を如何に多く獲得するかに一生懸命で、福岡全体の学生数をいかに増やすか、あるいはより多くの留学生をどう呼び込むかといったコミュニティとしての企画はあまり聞きません。

私は、各大学それぞれが大規模化して総合大学を目指すのではなく、サイバー大学のような小さな大学でも、中小の大学が個々の特長を生かしてネットワーク化してはどうかと考えます。つまり「福岡大学連合システム」といった、高度にネットワーク化された複合大学システムを整えてはどうかと思うのです。

ここで私自身のアメリカで大学教育を受けた経験をお話しします。東海岸は歴史がある私立大学が多く集積する地域で、特に「グレートボストン」と呼ばれるボストン周辺にはハーバード大学、MIT、ボストン大学などの有名大学の他にも、規模は小さくても特色のある極めてレベルの高い学部教育を実施している私立大学が多く点在しています。その一つに、クリントン国務長官の出身校でもあるウェルズリー大学（女子校）はリベラル・アーツ分野に特長があります。そこで理工学系で文系がどちらかというと弱い MIT は、ウェルズリーキャンパス間にシャトルバスを走らせて、両校の学生が双方の大学の科目を自由に履修し、単位認定されるようにしています。（MIT の学生には文系科目を履修する以外にも別の目的もあるようですが...）

MIT は他大学だけでなく、周辺の研究所とも大学院生向けの合同プログラムを設け、修士号や博士号を連名で授与するなど、極めて弾力的な高度専門家教育を行っています。

つまり、MIT といえども単独では教育しきれない新しい分野で求められる人材を輩出するために、他大学や研究所と共同でカリキュラムを設けざるを得ません。私の知る限り、このような取り組みは 60 年代から既に始まっています。そこにアメリカの高等教育の層の厚さを感じます。

私は、福岡に「グレートボストン」と類似した地域性を感じます。こうしたアメリカの優れた教育システムは昔からありましたが、現在はインターネットワークを活用して e ラーニング・システムを共有し、それぞれの大学の得意分野を持ち寄って、付加価値の高いカリキュラムを共同で作り、遠隔でも履修できる環境を整え、共同カリキュラムを履修して卒業した学生に対しては、関与した大学が連名で卒業証書を出す。私は優秀な人材を福岡エリアで育成する

ために、福岡中の大学が連携して、このような教育システムを構築しても良いと思うのです。

行政と大学群の連携で特色ある産業育成を

福岡が特徴を持つために、分野は福祉でも介護でも良いのですが、福岡でしかできないモデルケースを行政が主導して実践してくことが大切だと思います。福岡には元々高いポテンシャルがありますので、大学間の壁を壊してネットワーク化を促進することは、行政の大きな役割であり、さらには上海などアジアで関連する同様のプログラムを持つ大学をつなぎ、連携させて発展させることも、行政が果たす大きな役割ではないかと思います。

福岡独自の特色ある産業分野を行政と大学群が一緒に作り、国内は勿論、中国やベトナムなどの東南アジアを向いてそれを進めるべきではないでしょうか。個人的には、産業分野として新エネルギー、メディカルを含むヘルスケア、ソーシャルサービスなどが有望ではないかと考えます。

これは福岡の別の特長ですが、大学病院をはじめ病院が非常に多いですね。医療サービスや医学そのものの水準が非常に高く、東京よりもむしろ福岡の大学病院や民間病院の方が、中国との交流が多いように見受けられます。中国の医師が福岡の病院で研修を受けている実態があるとも聞きますし、そのような活動実績を聞くと、医療現場では中国は日本のどこよりも福岡を向いている気がします。そのような特色ある産業分野が一つでも二つでもあると良いと思うのです。

付加価値の高い産業や人材の育成に投資せよ

経済はグローバルで動いていますので、企業がより人件費が安い地域を求めて製造拠点を移すのは止められません。では、何が福岡でも特色ある役割が担え、かつ経済的な優位性が持てるかというと、人件費で考えるような部分ではなく、もっと上流工程の部分の仕事です。つまり、デザイン性や企画性、そもそものビジネスモデルそのものの創造にもっと力を入れるべきです。高い賃金を得るならば、やはりそれなりに付加価値の高い仕事をしなければ、国際競争には勝てません。

そこでは、イノベーションが大きなポイントになります。医療でもソフトウエア工学でも、それなりのものを福岡中心に生み出していくことが重要です。生産拠点は中国でもベトナムに移っても、新しい商品やサービスを生み出す根源、つまりそれらを企画し、創造する人材に対して最大の投資をして、新たな産業を生み出していく、そういう地域の構図にしていかなければいけないと考えます。

私が携わるネットビジネス分野でも、ソフトウエアの開発手法は相当変わってきています。今までは大規模システムを大人数で作り、従って中国やインドなど人件費単価が安い地域、つまりオフショアで開発することが採算性を維持する上で重要だったのですが、これからは大規模長期的な生産が求められる分野から、我々自身で極めて短いサイクルで高付加価値のサービスや製品生み出す分野へ移行していくべきではないかと思います。売上は多いけれどコストも多くなるというのが海外のリソースを巻き込んだビジネスですが、日本国内の少人数でより付加価値の高い仕事をし、そこでより多くの利益を上げていく。そのようなビジネスや産業をどんどん立ち上げていける、という構図に変わっていく必要を感じます。

新しい産業分野育成のため新しい人材育成を

これからは新たな顧客をつくること自体を産業にすることが重要になっていくと思います。つまりこれまでになかった市場をどう形成するかですが、まず人材育成をぜひ目指して欲

しいと思います。難しい部分もありますが、今までの製造業ではない、あるいは従来のソフトウエア産業でもない分野で、新しいビジネスモデルを生み出せるような取組みが必要です。具体的には、IT関連の製品そのものの生産から、ITを他の産業でどのように活用できるか、つまり応用力が重要になってきます。

デザイン分野で言えば、伝統的な工芸作品にモダンな感性を加え付加価値を生み出していくことは、福岡だけではなく九州全体の工芸産業の大きな特長になっていると思います。例えば、現在の有田焼には、極めてモダンでありながら長い歴史に裏づけられた工芸力によって制作された素晴らしい作品が沢山あります。しかし、その流通システムは、東京や大阪の専門店やデパート以外のルートでは、どうなっているのでしょう。毎年全国から有田を訪問する人たちのデモグラフィ（年齢、在住地、職業など）はどうなっているのでしょう。どのような作品が、どのような人にアピールするのでしょう。IT を使えば、これらの質問への回答のいくつかは直接的に見出すことが可能と思います。

ソフトウエア産業の分野は、急激な発展を遂げているとはいえません。ゲーム産業もいくつかの限られた企業は成功していますが、地域的な大きな産業にまでは至っていません。ここでもやはり、大学との連携が重要になると考えます。大学では極めて高度なコンピュータ・アーキテクチャの分野から、ソフトウエアの開発まで総合な研究や教育を行っています。この分野においては大学と産業との連携が比較的取りやすいと思います。大学教育や研究と企業活動を連携した長期的なインターンシップ制度を整え、人材育成の強化を図る地域の強みとして取り組んではどうでしょうか。

十年の計を持って行政は揺ぎなく先導せよ

福岡の気質として、助け合いやボランティア精神が高いことは、コミュニティを大事にする習慣と相まって福岡の土地柄の親和性の高さを示しています。東京で同様なコミュニティを作ってもなかなかうまく運用できないので、福岡に来てそのことを強く実感しています。しかしながら、多くの場合、個人のリーダーシップに依存する面が大きいので、属人的なもので終わらせずに長期的で組織的な動きにするとことが重要と思います。

私の担当科目のひとつで、アナログ放送から地デジ放送への移行に関する講義を準備していた際、約10年前に当時の総務省の担当課長の地上波放送を全部デジタル化する目的と意義の発表文を見直す機会がありました。そして、今年の7月にいよいよ実施されたわけですが、その時のメッセージが将来的な放送と通信の融合をふまえた情報のデジタル化という国家戦略として発せられていたことを改めて認識しました。そこには「十年の計」がちゃんとあり、実現に向けての障害がありながらも、ほぼ計画どおりに推移しています。法的整備など、課題はまだ沢山ありますが、技術的には確かにその流れになっているのは流石だと思います。

10 年の長期計画を達成するという足腰の強い企業は現在ではなかなかなく、経済情勢がそれを許さない状況もあります。「福岡の将来はこうあるべきだ」という「十年の計」を持ち、揺るぎないものとしてリードし、企業や大学をサポートできるのは行政の大きな強みだと思います。福岡の熱い方々と一緒になって、福岡の成長へと導いていただきたいと思います。

インタビュー日：2011/7/28 文責：URC 栗原